

尼崎の土地の成り立ちと歴史を学ぶ

—『尼崎の歴史展』子ども向けワークシヨップ感想—

田 中 眞 吾

(たなかしんご)
(神戸大学名誉教授)

ここでは当日のワークシヨップのうち、微地形別に区分された白地図を塗りわけること、および、六〇年前の航空写真を使い古い尼崎の空からの様子を学ぶワークシヨップについての感想を記すことにする。

筆者が、ワークシヨップの元図となった「尼崎の微地形」図の作成に使った資料は、昭和一七年（一九四二）に撮影された空中写真である。それらの空中写真は、空中写真撮影が国防的見地から厳しく制約を受けていた時代のものであり、撮影された年代の古さ、縮尺が八、〇〇〇分の一大縮尺という両面からも、貴重な写真である。

六〇年前の尼崎市域は大部分が農地であり、したがって、大地の表面は、自然界の諸作用が形成したままの状態を反映していると考えられる写真群であった。

それらの写真を実体視することによって区分した微地形

の内訳は、旧河道とその両側の自然堤防とその断片、河間にはひろがる氾濫原、海成の平野、海成平野上の砂州列などを判読し、区分、図示した。すなわち、尼崎市域近辺が都市化のために改変される以前の、武庫川や猪名川の下流の氾濫原や海成平野の上に、日常的にみられていた微地形群である。児童は、これらの微地形群の白地図を、指導員の学生たちの指示によって、例えば旧流路は青、砂州は黄色というように、塗り分けていく作業を行なった。

この作業を通じ、地域の低地上を網目のように繋がって流れている旧流路の大部分が西方の武庫川や東方の猪名川から枝分かれして市域に流れてきたものであること、また、それによって尼崎の低地が作られていることを知ることができる。また、海岸に近い尼崎の中心市街地が広い砂州上にあること、そのような海岸に平行に続く砂州地形がより内陸側にも何列もあることから、尼崎の低地の中央部は海的作用で作られ、その作用が次第に現在の海岸の方へ移ってきたものであることを知る。また、都市化する前の古い集落が自然堤防や砂州という微高地上に位置していることも知った。このことは、後に、考古学の先生方によって、多くの遺跡も微高地上にあることも教えられた。



子ども達に説明する 田中眞吾氏

このようにして、人家や道路で埋め尽くされた、現在では全く判らなくなっている尼崎の低地の素顔、土地の生い立ちやその歴史を学んだはずである。

ワークショップの最後は、微地形図の作成に使った空中写真の実物に触れ、空中写真を読む経験である。用意された写真は、前述の微地形図作成に使った写真に近い年次のものである。昭和二三年に米軍が撮影した空中写真を拡大したものである。地域の現状からは想像も付かない、素顔の大地の写真を見る機会はめつたにない。

まず、児童はそれぞれの学校の位置を教わり、校門から自宅への道をたどることを試みる。学校はあっても、町中を自宅へたどっているいつもの道は、途中で途切れてしまうことが多い。彼らは、まだまだ農地が広がった頃の歴史上の尼崎の、今までみることが出来なかった大地の状況を知らされる。

中には、実体視をするために用意された簡易実体鏡を使い、空中写真の実体視を試みている、チャレンジ精神旺盛な児童もいた。しかも、それを難なくこなしている子どもたちには驚いた。

私自身、大学で学生を相手に、空中写真判読の実習を毎年のように行なってきた経験を持つている。空中写真の実体視は、山は平生みる以上に高く見え（水平方向の一・五倍）、小さな崖も明瞭となる。起伏を増大させて見せる、さわだつ「過高感」にもとづく初めて目にする景観像に、多くの学生は歓声を上げてくれた。しかし事前の準備には、たいへん手間がかかる。

このような筆者の経験からして、指導に当たった学生諸君の労苦はしのばれる。資料の準備、児童を誘い込む話の方、手際よく的確な指導ぶりに感心させられた。彼らの精進に敬意を表したい。